

病院でのCL活用

—おがわクリニック 吉岡 順子（宮崎県延岡市CLインストラクター）

患者サイドの高齢者用施設

腎臓・透析を主な診療としているおがわクリニックで総看護師長を務める吉岡さんは、建設的なアイデアを病院運営に活かしています。長期間の治療が必要な患者さんが多く、高齢化に伴い通院が難しくなる人が増えてきました。そこで同クリニックでは治療と生活ができる施設を増設しました。そこでは場所は違ってできるだけ自宅で過ごすと同じように患者さんサイドの工夫がされています。例えば、どの病院にもある霊安所を設けず、亡くなったときは自宅と同様に施設の玄関から皆で見送ります。これは病院側のアイデアですが、患者さんらの賛成を得てそのようになりました。また、お盆の迎え火や送り火も患者さん、家族、病院のスタッフといっしょに行ないます。食べるのが不自由になった患者さんから、鍋をつつきたいな—という要望を聞いて、我が家でしていたと同じように家族をそこに呼んで、いっしょに寄せ鍋をしてもらい、家族で賑やかに鍋を囲んでもらいました。患者さんは汁をすするだけでしたが、大喜びだったそうです。


目的を確認し、具体的な行動に移す

ある日、理事長からスタッフの言葉遣いが悪いと指摘された。お年寄りの患者さんに対して友人以下の言葉遣いをしているので看護師長たちに指導要請があった。若い看護師は、マニュアル教育に慣れていてマニュアルどおりの仕事はきちんとするが、マニュアルから一步はずれると対応できず困ってしまう。マニュアルの目的を知らない場合があるので、面談で再確認してもらおう。病院の理念にそった看護師の理念が名札の裏に記入されているので、それをときどき見て、それにそった行動をするよう確認してもらおう。理念は「おもいやりの態度をもって看護を提供する」。「では、おもいやりの態度はなんですか」「あなたの言葉遣いもそうですね」と聞いて再確認してもらおう。

年配の男性が自分ですべき人工肛門の管理を妻やスタッフに頼ってケアの仕方を覚えようとしないう患者さんの指導に手を焼いて、ときに感情的になって「きのう言ったでしょう」とか「やる気ないんでしょう」と相手動かそうとする強い言葉をかけてしまう。優しい接し方だけではなかなか覚えられないので、厳しく教えて気がつく人もいて、患者さん自身のためでもある。との看護師スタッフの意見はそのとおりだが、患者さんによっては、言葉がきついと教えてくれているというより、馬鹿にされたとか、娘ほどの若いもんにいわれなければならないとか、スタッフの意向とは別の意味を相手が受け取ってしまうかもしれない。ときどき優しく、ときどき厳しく、しっかりやり方を覚えてもらいたいことを患者に伝える必要もある。患者さんが受け入れやすい、言い方や言葉遣いに変える必要はないだろうか。と看護師に問いかける。多忙極まりないスタッフは一人の患者さんだけに手間をかけられない場合が多く、効率的な言葉かけにも工夫が必要だ。「少なくとも最後の言葉はですとまずにしてみてね」と提案する。

看護の中に教育的要素が多く含まれる。患者さん自身に覚えてもらいたいことがたくさんあるのでやり方を指導するが、奥さん任せにして覚えられない高齢の男性が数少なくない。伴侶任せにせず、自分でしっかりケアを身につける患者さんは、家庭での日常生活もご夫婦でうまくこなしているように見える。

ogawa525@ma.wainet.ne.jp

 [目次へ戻る](#)